病と健康をめぐる ニンゲン学

中野重行

医療の分野では、患者との対話を重視する医療コミュニケーションの教育が増えており、医療面接の技術力が、客観的臨床技能評価試験（OSCE）で評価されるようになりました。診察室を想定し、模擬患者を相手に診察を行うワークショップも増えています。

私は1965年に医師となってから、心と病気の関係を診る心身医学と薬の効果を評価する臨床薬理学を専門にしてきました。現在、大分大学医学部創薬育薬医療コミュニケーション講座客員教授として、医学生や研修医らの医療コミュニケーション教育に携わり、全国各地で医療コミュニケーションを学ぶワークショップの企画や運営を行っています。ワークショップでは、患者役を務める模擬患者の養成に加え、患者との対話の重要性を若い医療者に伝えています。

全国に先駆けて始めた大分県の医療コミュニケーション研修は15年目を迎えた

上達のコツは〝かたち〟

心通わせ発展を目指す

医療面接は、実際の臨床の現場での診療とかけ離れたものになっているのではないか？」という質問を受けることがあります。このような質問に私は「何事においても、上達のコツは、先ず型（かた）を学ぶこと、その型に自分の心、つまり、血（ち）を通わせて、形（かた＋ち＝かたち）にすることにあります」と答えています。「ち」は、乳（ち）であり、また霊（ち）でもあり、とても重要なものの意味です。

研修の場で医学生や指導者から「OSCE対応の医療コミュニケーションの学習も、「稽古」として身に付けるつもりで対応すると、上達も早くなると思います。

OSCE対応の医療面接は、型を学ぶことを重視しています。早く型を習得して、そこに自分の心を通わせて「自分の形」をつくることが大切になります。そして、「自分の形」をさらに発展させていくことを目指していくのです。

武道で師弟関係の在り方を表す言葉に「守破離」があります。守（教えを守り、ひたすら基本を身につける段階）、破（それまでの教えを基礎として、殻を破り躍進する段階）、離（一つの形にとらわれることなく、自分の思いのままに行動してもうまくいく段階）を表したものです。武道に限らず、あらゆる道の修行における段階の順序を示した「守破離」は、古くから伝わってきた先人の知恵ではないでしょうか。

芸能やスポーツの世界では「稽古」という言葉を使います。医療コミュニケー

（大分大学名誉教授・元同大学病院長）

＝随時掲載＝